

相談・研究部門を「繋ぐ」人として

中野 敏子

「出会い」

杉山佳子先生、長い間、ありがとうございました。先生とお目にかかったのは、私が前任校の実習巡回で、ある保育園をお訪ねしたときでした。もう、四半世紀前のことになります。近くに川が流れていて、というところまでは記憶にあるのですが、今、訪問しなさいといわれたら、全く見当もつきません。その園の園長さんが、そのころソーシャルワーカー協会の活動を熱心にとりまとめてくださったっていた明治学院大学の卒業生でした。何か導きがあったのでしょうか。不思議でした。園長さんが「うちの園ではソーシャルワークを重要な機能として位置づけています」と、奥からソーシャルワーカーさんと呼ばれました。それが、杉山先生でした。先生が子どもの育ちと家族の支援に深く関わっておられたことはその時から知る「出会い」となりました。

「研究所相談・研究部門」での活躍

社会学部付属研究所の『研究所年報』18号（創立30周年記念号）（一九八八年三月）に記念講演をされる重田信一先生の講演内容を深く聞き入っておられる風情の写真を発見しました。その横にはその当時の若手教員が並んでいます。研究所の相談・研究部門の研究者として既におられたわけです。ちなみに、私はその四月に着任しました。

社会学部教員は、研究所所員は持ち回りで担当するので、時折、先生と研究所所員として活動をさせていただきました。今は影も形もない旧研究所は別世界でした。現在のパレットゾーンには教務課などの事務棟と教室棟があつて、その一角から通り抜けると、昭和三〇年代が佇んでいました。付属研究所機能は、社会的な、あるいは学内的なさまざまな状況の変化に対応して微調整が必要であつたといえます。そのような中であつて、公的支援が不十分な折り、戦後、社会学部付属研究所が、担ってきた児童相談、そして児童・家庭相談の機能を繋いでいく役割に、先生は大きな貢献をしてくださいました。

研究者として「相談」に関わられた足跡は、付属研究所の「年報」はもとより、様々な報告書に、子どもから高齢期に亘る広い視野からの相談支援実践の記録と考察として残されています。とくに、『研究所年報』に記録された相談支援の歩みは、相談を求めて来られた方々を通して時代を反映するものでもあり、また、社会学部付属研究所相談・研究部門の歩みを語るものでもあるといえるでしょう。研究所研究員を辞められ、大学の専任

教員として学外で活躍の場を持たれた際にも、相談部の応援をしてくださいました。振り返ると相談部のまさに語り部であり、繋ぎ役を担ってくださったわけです。心より感謝申し上げます。

一貫して先生は子どもや家族に視線を注いで来られたわけですが、とくに、障害の分野に関心のある私には、障害のある子どもとその子育てについての論文はよく読ませていただきました。なかなか公的相談機関での相談の扉を開く勇気がないけれど、ここなら話を聞いてくれるかもしれないと、相談に来られたケースでは、当時、相談の機会が少なかった発達障害のお子さんなどにいち早く関わっておられ、ソーシャルネットワークへの働きかけの重要性を述べておられます。付属研究所も地域の子育て支援をバックアップする役割を担う様になってきています。これまで相談部に関わってこられて、先生が、ソーシャルワーカーとして、今、相談・研究部門にどのような期待をもたれるか、是非、伺っておきたいところです。

明学社会福祉学科を「こよなく愛でてくださる」仲間として

さて、ここ五年、先生とは、社会福祉学科のスタッフとして、学科の教育、運営に頭を悩ます仲間として過ごさせていただきました。発言の端々に学科を「こよなく愛でてくださったっている」ことが伝わってきます。学部生、大学院生として社会福祉学科の歩みを見続けてこられた立場からは、歯がゆさも感じておられることでしょう。「私、五年間だったけれど一〇〇人以上のゼミ生と出会ったことになるわ」と、ある日うれしそうに話してくださいました。きっと、厚みあるソーシャルワーク教育の機会を与えて下さったに違いありません。そのことを

相談・研究部門を「繋ぐ」人として

耳にして、ふと、我が身を振り返りました。先生が着任されたのは、今の私の年齢だったのです。これから、私は熱い思いで学生さんたちに向き合えるだろうか。

ソーシャルワーカーとしての道はつづく

退職されても、ソーシャルワーカーとしての人生はこれからまだまだつづくことでしょう。いつまでも。にこやかに、しかし、ぴりっとポイントを押さえる先生のその姿勢を忘れないようにしたいものです。お元気で活躍ください。